

## 天然記念物 湯の滝

### いまから将来までの課題 人工物撤去と外来魚類の駆除

**湯の利用停止** 国の天然記念物「オンネトー湯の滝マンガン酸化物生成地」の保護について、足寄町はすべてのお湯の利用を停止し、人工物を順次取り除き、自然の状態にもどす方針を固めました。

代替湯溜まりや滝のそばの休憩舎などは関係機関との協議・費用の調節をしながら、解体して取り除くこととなります。もともと人工のものですから、技術的にはさほど困難な作業ではないと考えられます。

**魚類駆除は長期にわたる** 問題は滝の下の池や下流の小川に生息する外来魚類ティラピアです。この魚はアフリカ・ナイル川流域の原産で、1962年、食用として国内に導入されました。当初は養殖池で飼われていましたが、生命力の強い魚で、全国の水温の高い水系（温泉付近など）に住み着いてしまいました。

ティラピアはもともと藻類食であるため、湯の滝でマンガン酸化物をつくりだしているシアノバクテリアなどの藻類にとってたいへん危険な存在です。教育委員会では平成12年の天然記念物指定の直後から駆除に取り組んできました。いままでは観光協会役員や役場の職員にも参加してもらい大きな網を使っていました（昨年12月の52号をご覧ください）。

今年、栄町2丁目の田村勝夫さんに参加していただき、「どう」という仕掛けを使って駆除をおこなっています。初日には500匹くらい取りましたが、滝の下の空洞や小川の下流数百mの範囲にすんでいるため取りきることは困難な状態です。

**螺湾川下流に拡げないためにも** ティラピア駆除は湯の滝だけの問題ではありません。水温が7~8℃でもエサを食べるそうです。つまり、螺湾川の水温が上がる夏の間の下流に広がってしまう可能性があります。

昨年制定された**外来生物法**（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）では、外来生物に対する3原則【入れない・捨てない・拡げない】を訴えています。環境省の説明にはティラピアも取り上げられており、湯の滝のティラピアは3つ目の「拡げない」に相当します。

ティラピアの完全駆除はすぐには困難ですが、滝の下の池から広がらないためにも、個体数を少なく抑える。このことを長期方針として取り組んでいきます。



「どう」と捕獲した魚、11月10日

## 化石人動静

### アショロア発見者 木村 学さん



### 日本地質学会会長に

1976年（昭和51年）7月、茂螺湾もらわんで足寄町最初の化石を発見したのは、木村 学さん。その当時、北海道大学の大学院生でした。木村さんは北海道の成り立ちを解明するために白糠丘陵の地質を調べていました。

木村さんはその後もずっと地質学の研究者として活躍され、日本列島ばかりでなく世界の地質の成り立ちをあきらかにするような研究を発展させました。現在は東京大学理学部の教授として研究・教育に活躍中です。

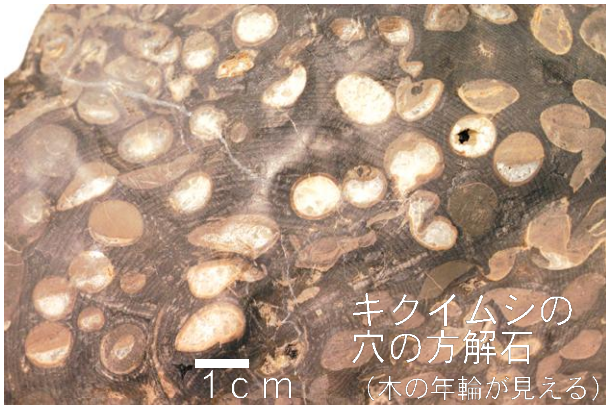
この度、「日本地質学会」の会長に就任されることになりました。同学会は、日本の地球科学の多くの分野の研究者が参加し、5000人近い会員がいます。地方博物館をふくめた幅広い地球科学の発展に尽力されるよう祈念します。

あしよろ

## 自然教室 炭酸カルシウムの不思議をたずねた 10月30日

留真地域の深海堆積層とシオワッカにみられる炭酸カルシウム鉱物をたずねる企画は、炭酸カルシウム鉱物と化石＝生物との密接な関係を再認識する結果となりました。

9月号でお知らせした玄能石はたくさん見つかりました。玄能石をふくむ泥の層は音別層群と呼ばれるおよそ3000万年前の海にたまった地層です。付近には貝の化石もありましたが、貝殻のなかの空洞に炭酸カルシウムの結晶である方解石ができていたものがたくさんありました。また、海底に沈んだ材木は木食い虫（といっても実は二枚貝）に食われて細長い穴が開きますが、そんな穴の中に白くかがやく方解石が詰まっている木の化石（木石）もあり、参加者18名は驚きに満ちた楽しい1日をすごしました。来年度は「化石教室」としていこう、という声がありました。



## 休館日 || 12月 6日、13日、20日、27日、30日、31日

博物館の動き 11～12月（館の行事や職員の動き、来館団体、など）

11月

30日 国際協力機構南アジア教員養成学校の先生方

12月

1日 白人小学校（幕別町）のみなさん  
17日 犬塚則久博士（東京大学医学部）アショロア研究のため来館、26日まで滞在  
25日 博物館友の会「デスマクラブ」学習会  
30日 仕事納め（休館いたします）

12月30日～1月5日  
年末年始の休館